



鈴木健二

(有) ケニスプロン

Kenji SUZUKI [名誉会員] sukken@msc.biglobe.ne.jp

1976年、早稲田大学大学院理工学研究科博士課程修了。工学博士。1976～2000年、国際電信電話(株)(KDD)にて、通信プロトコル・ソフトウェア・システムおよび製品検証手法に関する研究開発ならびに研究所マネジメントに従事。2000年、ベンチャー企業に参加後、独立し、IT企業コンサルタント。2005～11年、電気通信大学情報工学科教授。現在、(有)ケニスプロン取締役社長。本会理事、監事歴任。

[No.89]



## Real timeからRight time通信へ

近年、ガラケーやスマホを持ち歩き、場所・時間にとらわれずインターネットにアクセスする人が多い。また、AIやセンサ技術の進展も著しく、インターネット上の購買サイトでも、顧客の位置情報やアクセス動向により、個別の広告を提示するなど、企業による顧客対応の変化も顕著である。反面、顧客側では、自分自身の行動や嗜好が第三者に知られ活用されるプライバシー侵害に敏感である。これら世の中の変化の根底には、人や機器間で情報伝達を行う通信の発展がある。この情報伝達は、古くは飛脚による郵便、電話、さらにはデータ通信という流れで発展してきたが、マルチメディア化、蓄積・変換サービスなどで拡充されるに伴い、その役割も、単に「情報をできるだけ早く伝達する」というものから、徐々に変わりつつある。

私が通信会社に入社したのは1976年のことである。当時は、NTTのDDX-PやKDDのVENUS-Pというパケット交換商用サービスの開始を直前に控えた、日本におけるデータ通信の黎明期だった。私も入社直後からパケット通信機器の開発に関与し、CCITT(国際電信電話諮問委員会)の標準化作業に参加し、パケット通信インタフェースを持たない非同期端末をパケット網(X.25, X.75)経由で、遠隔のホスト計算機にアクセスするためのPAD(Packet Assembly/Disassembly) 勧告(X.3, X.28, X.29)の作成を担務した。また、通信システム構築を通じて、プロトコルの開発、動作確認・検証などの研究開発を進め、商用機の完成に繋げた。当時のパケット網は、伝送速度が2400～9600bpsで、Real Time通信とはいうものの、できるだけ遅延しない通信を目指していた。実際、PAD経由で外国データベースからの情報検索が簡単・迅速に実施でき、利用者の評判も良かった。しかし、研究者としては、同時に、“情報検索しても、得られた情報が理解されなければ意味がない、もしかすると、情報をできるだけ早く伝達することより、情報の意味を正しく伝えることの方が重要かもしれない”という考えが芽生えた時期でもあった。これは、上司や部下との会話があっ

ても、話の中身が正確に伝わらなければ意味がないという思いに通じる。

その後、光通信や無線通信の技術も進展し、高速インターネット時代に移行するに伴い、また、私自身がベンチャー企業の経営に参画して、顧客や異業種の方々との交流が増えるにつれ、「情報の意味を伝える通信」という思いが強くなった。特に2003年9月に、The 2003 Annual Teradata PARTNERS Conference and EXPO, Seattle, USA に出席し、TeradataのRon SwiftとWest PackのFernando Ricardoによる“Creating the intelligent real-time enterprise”という対談を聞いたときに、さらに意を強くした。ビジネス最先端にいる彼らの課題と私の関心とが一致していた。彼らは、ITを活用して企業経営を推進する際の鍵としてReal timeとRight timeの違いをうまく表現した。Real timeはお客様の要望や状況に瞬時に対応する会社の能力であり、Right timeは、各々のお客様への対応、情報提供、サービス提供する時点において、お客様を納得させ、商談成立の可能性を高めるための通信能力だという。私が思うに、Real timeでは、ビジネスやお客様対応において、さまざまなチャネルを使って情報伝達時間の遅れを小さくすることが必要であり、Right timeでは、お客様やビジネス状況の的確な把握、それらを促進する解析ツールや自動判断が重要となる。ビジネス的には、お客様の必要な時点でサービスを提供するため、サービス提供もうまくいくし、お客様にも喜ばれるという話となる。その後、IBMが標榜するRight time informationも知り、同様の意図を感じた。

人が何かを決断するとき、それまでの情報の蓄積・理解、さらには最適なタイミング(潮時)が必要なように、さらなる高速化が期待される今後の通信で、そのReal time性に加えてRight time性をも加味できれば、新たな通信サービスの展開が見えてくると思う。

(2018年2月19日受付)